

紹介

平沢竜介著

『王朝文学の始発』

佐藤信一

平沢竜介先生による「古今歌風の成立」に引き続き第二論文集である。最初に、目次を掲出しておく。

はじめに

第一章 上代文学から平安文学へ

第一節 古代文学における自然表現―「古事記」「万葉集」から平安文学へ―

第二節 散文による心情表現の発生―「土佐日記」の文学史的意味―

第三節 「古今集」の時間

第四節 「古今集」の擬人法―「万葉集」の擬人法との比較を通して―

第五節 「古今集」の和歌―詠人しらず時代の歌から撰者時代の歌へ―

第二章 「古今集」の構造

第一節 春の部、冒頭の構造

第二節 春の部、「梅」の歌群の構造

第三節 春の部、末尾の構造

第四節 秋の部、「立秋」の歌群から「秋の虫」の歌群までの構造

第五節 秋の部、「雁」の歌群から「露」の歌群までの構造

第六節 秋の部、「女郎花」の歌群から秋下末尾までの構造

第七節 冬の部の構造

第八節 賀の部の構造

第三章 上代歌論から貫之の歌論へ

第一節 「歌経標式」「万葉集」の歌論から「古今集」の歌論へ

第二節 「土佐日記」の歌論―和歌に関する記述の分析を通して―

第三節 貫之の和歌観―本質論、効用論を中心に―

第四節 「源氏物語」と「古事記」日向神話

第一節 「源氏物語」と「古事記」日向神話―潜在王権の基軸―

第二節 末摘花論―石長比売と末摘花―

終章

あとがき

索引（和歌初句・語句）

まず「はじめに」で全体の見通しを俯瞰する。第一章第一節

では自然表現の具体性と言うことから上代文学、中古文学を通覧する。第二節では「土佐日記」や「万葉集」の死の叙述の検討から心情表現の成り立ちを探っている。第三節では「古今集」の時間の推移を感じさせる表現技法に論究している。第四節では「古今集」の重要な表現技法として擬人法を挙げ、「万葉集」の擬人法と比較して論じている。第五節では従来の時代区分をもとに、序詞、掛詞、見立てなどの修辞技法に着目して考察している。第二章第一節では「古今集」巻一、冒頭の配列に構造を読み取る。第二節では「梅」の歌群の配列に表現効果を見ている。第三節では「花」の歌群が「藤」の、また「山吹」の歌群に移行する配列に、より高次の構造を形成している

と見る。第四節では「秋」の歌群が「春」の歌群と対応するようには詠ぜられているとする。第五節では秋の歌群に詠じられている景物がそれぞれ照応していることを論じる。第六節では、秋の景物それぞれが、脈絡をもって配列されていることを指摘する。第七節では、冬の部冒頭の歌の表現を検討し、連続性を保ちながら確実に時の推移が語られるとする。第八節では、賀の部の作者表記、並びに詠歌事情から読み解こうとする。第三章第一節では、「歌経標式」と「万葉集」の和歌に対する批評を比較しながら、「古今集」の「心」「詞」の認識に支えられた批評を検討する。第二節では「土佐日記」における和歌に関する記述を問題にしている。第三節では貫之が和歌をいかなるものと捉えていたか、和歌の本質や効用をどのように考えていたのかを考察している。第四章第一節は、明石の君を、西・海の神の娘、紫の上を、東・山の仏の娘と捉え、神話との対応を見

る。第二節では末摘花の「ものづつみ」や「世づかぬ」性格に石長比売との類似点を見出している。終章では、今までの論述を振り返り要約がなされている。

全体的に平沢先生の和歌への進るばかりの愛情に支えられた論致であろうと思われる。そのことは、ジャンルが何にせよ後に続く僕たちが継承発展させてゆかねばならない点であろうことを信じて止まない。

(二〇〇九年二月二十八日刊 A5判 四八三頁 笠間書院)